

# 強い賢い王様の話

豊島与志雄

青空文庫



むかし印度いんどのある国に、一人の王子がありました。国王からは大事だいじに育てられ、国民からは慕したわれて、ゆくゆくは立派りっぱな王様になられるに違ちがいないと、皆みなから望のぞみをかけられていました。

ところが、この王子に一つの癖くせがありました。それは、むやみに高い所へあがるということでした。庭にわで遊あそんでいると、大きな庭にわ石いしの上に登のぼって喜よろこんでいますし、室へやの中なかにいと、机つくえや卓タイプ子ルの上に座すわりこんでいます。そういう癖くせがひどくなると、しまいに、後庭こうていの大きな木によじ登のぼったり、城壁じょうへきの上に登のぼったりするようになりました。国王や家来けらいたちは心配しんぱいしまして、もし高いところから落おちて怪我けがでもされるとたいへんだというの

で、いろいろいつてきかせましたが、王子は平気でした。ある時なんかは、城の中に飼つてある象の背中に乗つて、裏門から町へでて行こうとまでしました。その象がまた、平素はごく荒つぱいのに、その時ばかりは、王子を背にのせたまま、おとなしくのそりのそりと歩いているではありませんか。

国王はひどく心配しまして、なにか面白い遊びごとをすすめて、王子の気を散らさせるにかぎると思ひました。それで、多くの学者たちが集つて、いろんな面白い遊びごとを考えだしては王子に勧めました。すると王子はこう答へました。

「高いところからまわりを見おろすのが一番面白い。世の中にこれほど面白いことはない」

どうにも仕方しかたがありませんでした。それで皆みなは相談そうだんして、その癖くせが止やむまでしばらくの間あいだ、王子を広い庭にわに閉じこめることになりました。庭にわには木も石もなく、ただ平たいらな地面じめんが高い壁かべに取り巻まかれてるきりでした。王子は朝から夕方まで、この庭にわの中に閉じこめられました、どこを見ても、自分があがれるような高いものは、なに一つありませんでした。そして、とうてい登のぼれないほどの高い壁かべが四方にあるだけ、なおさらつまらなくなりまして。いろんな遊あそびごとを皆みなから勧めすすめられても、王子は見向むきもしませんでした。芝生しばふの上に寝ねころんで、ぼんやり日を過すごしました。ある日も、王子は芝生しばふの上に寝ねころんで、向むうの高い壁かべをぼんやり眺ながめていました。壁かべの向むうには、青々とした山の頂いただきが覗ぞいて

いました。その山の上には白い雲くもが浮うかんでいて、さらにその上遠とおくに、大空まるとが円まるくかぶさっていました。

「あの壁かべの上にあがったら……、あの山にあがったら……、あの雲くもにあがったら……、そしてあの空の天てん井じょうの上……」

王子は一人で空想くうそうにふけりながら、大空なごを眺ながめてるうちに、いつか、うっとりした気持きもちになって、うつらうつら眠ねむりかけました。

誰だれかが自分を呼よぶようなので、王子はふと眼めを開ひらきました。見ると、すぐ前に一人の老ろう人じんが立たっていました。真ま黒くろな帽子ぼうしをかぶり、真ま黒くろな服ふくをつけ、真ま黒くろな靴くつをはき、手に曲まがりくねった杖つえを持もっていました。顔かおには真ま白しろな髯ひげが生はえて、その間あいだから

大きな眼めが光あっていました。

王子が眼めを覚さましたのを見て、老人ろうじんはハハハと声こゝろ高く笑わらいました。王子は恐おそれもしないで尋たずねました。

「お前は誰だれだ？」

老人ろうじんはまた笑わらっていました。

「誰だれでもいい。お前まへをためしにきた者ものだ。……わしがお前まへを高いところへつれて行いってやろう。わしと一緒しよにくるがいい」

「本ほん当とうに高い所ところへつれていいってくるのか、僕ぼくが望のぞむだけ高いところへ？」

「うむ、どんな高いところへでも連つれていいってやる。そのかわり、また下したへおりようといいっても、それはわしは知しらない。それでよ

かつたらわしと一緒にしよくるがいい」

「行こう」

そういつて王子は立ちあがりました。

「しかし、下へおりたくなつたからといつても、もうわしは助けたすてやらないよ」と老人ろうじんはいいました。

「高いところへあがれさえすれば、下へなんかはおりなくてもよい」と王子は答えこたえました。

「それでは行こう」

老人ろうじん人は王子の手を取つて、杖つえを一振り振ひつたかと思うと、二人はもう高い壁かべの上にあがつていました。王子はびっくりしました。この老人ろうじん人は魔法まほう使いつかいに違ちがひない、と思おもいました。しかし

恐こわがることがあるものか、と思いなおしました。見ると、自分が今まで居いた庭にわや城じょう外の町などはずっと、下の方に見おろされました。往いき来きしてゐる人間が、豆粒まめつぶのように小さく見えました。王子は嬉うれしくてたまりませんでした。そして、城しろの高い塔とうを指さして老人ろうじんにいいました。

「こんどはあの塔とうの上に行こう」

老人ろうじんが杖つえを振ふると、二人は一番高い塔とうの屋根やねにあがりました。王子はまだこんな高いところへあがつたことがあります。足下あしもとには、広い城しろが玩具おもちゃのように小さくなって、一足ひとあしに跨またげそうでした。庭にわや森もりや城じょう壁へきや堀ほりなどが、一目ひとめに見て取れて、練兵場れんべいじょうの兵士へいしたちが、蟻ありの行ぎ列ようれつくらいにしか思われませ

んでした。城しろのまわりには、小石こいしを並ならべたような町並なみが、遠とおくまで続つづいていました。その末すえは広々とした野のになって、一面めんに、ぼうと霞かすんでいました。王子はただうっとり眺ながめていました。

「まだ高いところへあがりたいか」と老ろうじん人じんはいいました。

王子は我われに返かえって老ろうじん人じんの顔かおを見あげました。それから、向むこうの高い山の頂を指しました。

「あの山の上へ行こう」

老ろうじん人じんが杖つえを振ふると、二人は宙ちゆうを飛とんで、すぐにその高い山の

上にきました。王子はその岩いわの上に立たって眺ながめました。城しろや町はもうひとつの点てんぐらいにしか見えませんでした。土饅頭どまんじゆうぐらいな、なだらかな丘おかが起き伏ふくして、その先さきは広たいい平たいらな野のとなり、

緑の毛氈をひろげたような中に、森や林が黒い点を落していて、日の光りに輝いてる一筋の大河が、帯のようにうねっていました。

「もうこれきりにしようか」と老人がいいました。

王子はまた夢からさめたような気持で、老人の顔を眺めました。それから、うしろの方の一番高い山の頂を指しました。

「あの山の上へ行こう」

老人が杖を振ると、二人はまた宙を飛んでその山の上へ行きましました。

王子はびつくりしました。その山が一番高いのかと思つていましたのに、きてみると、さらに高い山が向うに聳えています。王

子はいいました。

「あの山の上へ行こう」

「ろうじん老人と王子とはまたその山の頂いただきへ行きました。すると、さら

に高い山がまた向うむこにでてきました。もう下の方を見廻まわしても、

積み重かさなった山や遠い野が少し見えるきりで、初めのような美うつくしい

景色は眼めにはいりませんでした。薄うす黒い雲くもがすぐ前を飛とんで行

きました。

「あの山の上へ行こう」と王子は向うむこの高い山を指さしていいしまし

た。

「望のぞむならつれていってもいい」と老ろうじん人は答こたえました。

「しかし帰かえりはお前一人だぞ。城しろの庭にわへおろしてくれといつても、

わしは知らないが、それでもいいのか」

王子は少し心細ほそくなつてきましたが、それでも構かまわないと答こたえ  
ました。そして二人は向むこうの山の上へ行きました。もう、なんに  
も見えませんでした。薄うすぐろ黒い雲が足下あしもとに一面めんにひろがつてい  
て、遠とほくの下の方で雷かみなりが鳴るような音がしていました。雲くもよりも  
高い山だったのでした。それでも、向むこうにはさらに高い山がつき  
立っていました。

「あの山へ行こう」と王子はいいました。

王子はただ高いところへあがつて行くことよりほかには、なに  
も考えてはいませんでした。この老ろうじん人まに負まけてなるものか、ど  
んな高いところへでもあがつてやる、という気でいっぱいになつ

ていました。そして二、三度高い方の山へと、老人につれられてあがつてゆきました。

ある山の上にくると、老人はそこにとんと杖をついていいました。

「お前の強情なものにはわしも呆れた。これが世界で一番高い山だ。もう世界中でこれより高いところはない。ここまでくればお前も本望だろう。これからまた下へおりて行くがいい。はじめからの約束だから、わしはもう知らない。これでお別れだ」

王子が眼をあげて見ると、もう老人の姿は消えてしまっていました。王子はぼんやりあたりを見廻しました。頭の上には、澄みきった大空と太陽とがあるばかりでした。立っていると

は、つき立った岩の上で、眼もくらむほど下の方に、白雲と黒雲とが湧き立って、なにも見えませんでした。冷たい風が吹きつけてきて、今にも大嵐になりそうでした。王子は腕を組んで、岩の上に座りました。いつまでもじっと我慢していました。しかし、そのうちに、だんだん恐しくなってきました。風が激しくなり、足下の雲がむくむくと湧き立って、遙か下の方に雷の音まで響きました。王子はそつと下の方を覗いてみました。

屏風のようにつき立った断崖で、匍いおりて行くななどということはとうていできませんでした。

王子は立ちあがりました。そして考えました。

「あの老人に助けを求めたくはない。なあに、命がけでおりて

みせる。僕ぼくが死ぬしか、それとも、うち勝かつかだ」

王子は石を一つ拾ひろつて、それを力まかせに投なげてみました。石は遙はるか下の方の雲くもに巻まきこまれたまま、なんの響ひびきも返かえしませんでした。

「よしッ！」

と王子はいいました。

そして、岩いわの上から真逆まっさかさまに、むくむくとしてる雲くものなかをめぐけて、力ちから一ぱいに飛とびおりました。

.....

王子は、はっとして我われに返かえりました。

見ると、自分は城しろの庭にわの芝生しばふの上に寝ねころんでるのでした。か

らだ中汗ぐつしよりになつて胸が高く動悸していました。

しかし、いくら考えてみても、さつきまでのことが夢であるかまたは本当であるか、どうもはつきりしませんでした。本当だとするには、あまり不思議きわまることでしたし、夢だとするには、あまりはつきりしすぎていました。

「どちらでも構うものか」と王子は考えました。そしてまたこう考えました。「高いところへあがるには、まず第一に、また下へおりられるような道をこしらえておかなければいけない」

王子はそのことを国王へ話しました。

国王はたいへん喜んで、それからは王子を自由にさせました。

王子はやはり高いところへあがるのがすきでしたが、ちやんと

その下り道おみちをこしらえてからあがるので、少しも危あぶないことはありませんでした。

.....

この王子は後のちに、世界で一番強つよい、一番賢かしこい王様になりました。なぜなら、どんな高いところへあがっても平気なほどしつかりした気象きしょうでしたから、一番強つよかったですし、またちゃんど下り道みちをこしらえておくほど用心ようじん深ぶかかったから、一番賢かしこいのでした。

そして王子は一生のあいだ、あの黒くろい着物きものの白髯はくぜんの老ろう人じんを、自分の守護神まもりがみとして祭りまつりました。





# 青空文庫情報

底本：「天狗笑い」晶文社

1978（昭和53）年4月15日発行

入力：田中敬三

校正：川山隆

2006年12月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 強い賢い王様の話

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>